

やくぜん茶の種類・配合素材と その働きについて

(有)フクダ製茶園

※やくぜん素材の産地は、変わることがあります。ご了承ください。

	商品名	配合素材（産地）	薬効
1	春の嬉野 やくぜん茶	緑茶（佐賀県嬉野） 菊花（中国） クコの実（中国）	春は、環境が変わったり、新しいことが始まったりして、知らず知らずのうちにストレスや疲れが溜まりやすい季節です。特に、暖かくなり活動的になる分、目も酷使されがちになります。 この「春の嬉野やくぜん茶」は、 🌸 菊花とクコの実が、春の疲れやすい目をやさしく労わり、スッキリとクリアな状態へ導きます。 🍵 嬉野緑茶が、春の不安定になりがちな心を穏やかに整え、リラックスを促します。
2	夏の嬉野 やくぜん茶	緑茶（佐賀県嬉野） 薄荷（ポーランド） マイカイカ（チベット）	夏は、体内に熱がこもりやすく、じめじめした湿気で気分が重くなったりしがちです。また、冷たいものを摂りすぎて胃腸が弱ることもあります。 この「夏の嬉野やくぜん茶」は、 🍃 薄荷（ハッカ）が、こもった熱を頭からスッと冷まし、頭や顔のほてりやだるさを爽快にしてくれます。 🌺 マイカイカ（バラ）が、暑さやストレスで滞りがちな「気の巡り」をスムーズにし、気分をリラックスさせて、食欲不振の改善をサポートします。 🍵 嬉野緑茶が、胃腸の調子を整えながら、体全体のバランスをサポートします。 清涼感あふれる香りと味わいで、夏の心と体を軽やかにリフレッシュさせてくれるやくぜん茶です。
3	秋の嬉野 やくぜん茶	ほうじ釜炒り茶 （佐賀県嬉野） 金木犀（中国） 百合根（中国）	秋は、空気が乾燥し始めるとともに、夏の疲れや季節の変わり目の影響で心身が不安定になりやすい季節です。特に、喉や肌の乾燥、そして気持ちの落ち込みや不安感が出やすくなります。 この「秋の嬉野やくぜん茶」は、 百合根（ゆりね）が、秋の乾燥に弱い「肺」と「心」を潤し、空咳や肌の乾燥を防ぎます。また、精神を安定させ、リラックスを促し、落ち着かない気持ちを鎮めてくれます。 金木犀（きんもくせい）の甘く上品な香りが、滞った「気の巡り」をスムーズにし、気分をリフレッシュさせます。また、体を温める作用もあるため、秋の冷え始めから胃腸を守ります。 ほうじ釜炒り茶の香ばしい香りが、リラックス効果を高め、カフェインも少なめで、心と体を優しく鎮めてくれます。
4 12月より販売 予定	冬の嬉野 やくぜん茶	和紅茶（佐賀県嬉野） シナモン（中国） なつめ（中国）	冬は、厳しい寒さで体が冷え込み、血の巡りが滞りやすい季節です。また、寒さに耐えるためにエネルギー（気）を消耗しがちで、疲れや風邪を引きやすくなります。 この「冬の嬉野やくぜん茶」は、 *和紅茶とシナモン（桂皮）*が、体の中からしっかり温め、全身の血の巡りをスムーズにしてくれます。これにより、冷えや寒さからくるだるさ、風邪の予防をサポートします。 なつめが、「気」と「血」をダブルで補給し、冬に消耗しやすい元気と、肌や心の潤いを満たしてくれます。また、精神を安定させる作用もあり、冬の寂しさや不安感を和らげます。 スパイシーで温かみのある香りと、ほのかな甘みで、寒い冬に心身を強く、そして優しく守ってくれるやくぜん茶です。

嬉野やくぜん茶への想い

2025年の春から販売している新商品になります。

やくぜん茶開発のきっかけ：佐賀の宝と薬膳の出会い

この薬膳茶は、私自身が神奈川県在住の佐賀出身の薬膳の先生との出会いから生まれました。

薬膳料理教室に通い、「佐賀は、海山の幸に恵まれた食材の宝庫だ」と先生に教わったとき、地元に住んでいると気づきにくいその価値に、大きな誇りと勇気をいただきました。そして、その宝物の中にはもちろん、昔から愛されてきた「嬉野茶」がある、と強く確信しました。

○商品に込めた想い：心の安らぎと小さな循環

薬膳を学ぶ中で、心や気持ちは、体の「五臓」や「季節」と深く関係していることを知りました。

ストレス社会と言われる現代において、ストレスや気持ちの面は目に見えないため、ついにがしろにしてしまいがちです。しかし、昔から「病は気から」と言われるように、心の安らぎは健康に欠かせない大切な要素だと感じております。薬膳を通して、心が穏やかであることの大切さを改めて実感いたしました。

🍵 自分の心が豊かになることで、周りの方にも優しくなれ、その小さな循環が広がって、少しずつでも世界が穏やかで平和になっていけば——そんな想いを込めて、私たちはこのお茶づくりに取り組んでおります。

○故郷への想い：癒やしの地、嬉野から

嬉野茶の産地である嬉野は、お茶と温泉と焼き物の町として、もともと観光客の方が癒しを求めて訪れてくださる場所です。

この嬉野やくぜん茶を通して、もっとたくさんの方に嬉野の素晴らしい魅力を知っていただき、「癒やしの循環」を広げていきたいと願っています。